
曾祖母講釈 間引き三篇 (および筆者解説)

遥 夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曾祖母講釈 間引き三篇 (および筆者解説)

【Nコード】

N5151BA

【作者名】

遥 夏

【あらすじ】

曾祖母が語った東北地方の民話。

本稿は、当サイト「小説家になろう」の麟龍凰先生による企画『Smile』に向けて書き下ろしたものである。

（前書き）

筆者が幼少のおり、曾祖母に口伝えされた東北民話を紹介する。「小説家になろう」の麟龍凰先生による企画『Smile』に向けて書き下ろしたものである。

【姥捨と妖怪「逆さ柱」】

姥捨の話はしたことあつぺか。

山の奥のほうの話しだけんが、昔はよ、食べるモンが少な
くと、働き手にならねえ家族は殺されつちまっただ。

姥捨はよ、年取つて足腰のたたねくなつた母親を山の奥さ捨てて
くつぺつてことだわ。

実の母親に死んでくれつて頼まねえとなんねえ子どもも気の毒だ。
床下に隠してよ、村の連中じゃ「ちゃんと捨ててきたど」つて言
つたりしたんだと。

んで、貧しい村に、年寄りが一人もいねくなつたときだわなあ。
「これはどうすつぺ、どういう仕来りだつたつぺ」つうことが出
くんだよ。

親が死んじまつた後になつて、聞かなくちゃなんねえことがたく
さんあるわあるわ。

そんなとき、隠してた婆様に相談できたもんでよ、そいつは皆つ
から頼られたんだつぺ。

子どもを遺して逝がねばなんねえ親も気の毒だつぺなあ。

どれだけ大人になつたつて、お腹いだめて産んだ子どもよあ。
いつまで一緒にいだつて子どもつぽくて頼りなかつぺよ。

自分が山さ置き去りにされつちまつたつてかまわねえけん、せ
がれは無事に家さ帰れんのが心配だと思つてよ、いろりの白灰を持
つてから負ぶさつて、帰りの道の道しるべにしたつう話もあんだ

わな。

親の心も子の心も、なかなかお互いでは分かんねえもんだ。

寒くて、帰るに帰れねえような山んなかさ捨てて殺しつちまあんだから、生き残った家族のほうは悪いもんが見えるようになんたっぺ。山の帰り道で狐につままれたり、狸に化かされたりよ。大事にしてえもん守れねえがたつたって心があつと、心理つうもんが壊れんだわな。

岩手のほうによ、いろんな妖怪が出るんだわ。

逆さ柱とかいってよ、柱には木目があっぺよ？

それが、捨ててきた親の笑ってる顔に見えたりよう、天井板の染み見れば怒ってる親の顔に見えたりよう。そういうのが襲ってくるようつた、悪い夢にうなされては、やれ妖怪だつうことになんだっぺ。

おらあ、もう少しわがい頃、遠野つうとごさ旅行したっけ、夏だつてのに足はずつと薄ら寒がったなや。たくさん捨てられたつていう、今は野つぱらだか畑だかになつちまてるとこ行つたときにや、背筋がひやあつとしたもんだわ。

* * *

【臼殺と妖怪「座敷わらし」】

座敷わらしって妖怪がいつぺ？

いつぺ、つたつて、おめえが座敷わらしみてえつたけど、よくでるって話は岩手のほうだわな。

臼殺ウスつってよ、昔には食いモンねえ冬になりそうだったときは、働き手になんねえ子をよく殺したんだわ。

産まれたての時に殺したりよ、いま子どもが産まれたら困るってときは、妊娠した女の人は川の水さ浸かって子どもを流したりよ「腹減った」って泣く餓鬼めらは石臼に頭たたきつけて殺したんだと「悪い子はいねえが」っていう鬼がいつぺよ？ 今は殺しやしなかつぺと思っけんのが、ああやって当番して村の子どもたちさ殺して周った風習があんのがしんね。

んだら、殺した親はよ、そこかしこ死んじまったはずの子どもが見えんだわな。

座敷わらしつうのは、そういう姿だつぺ。

こんな風に育ったらいかたつぺなあ、つうのが、隠居座敷さ見えつちまうんだ。

子どもが帰ってきたら、嬉しかつぺよ。

それとも、もしかすつと、自分たちで殺した子が戻ってくんだから怖いもんかもしんねえな。

んでも、立派になって帰ってきたんだと親は信じるのかもしんねえわ。

* * *

【はがき伝承】

昔よ、食いモンがない貧しい村では間引つつって、役にたたねえのは家族で殺しちまつたんだと。

特に女だわ。

年とつて脚が動かねくなつた婆さまと、大きくなつても力仕事になんねえ女の子どもと。

男もいたこたんだつぺけどな。

捨ててしまっただわ、山の奥さ持つて行ってよ。

脚が動かねえ婆さまなら置き去りにしまえばいいんだけど、子どもだとそうはいがねえから岩に子どもの頭をぶつけてよ、虫の息にしてから置いて行っっちゃまうんだ。

今年も食いモンがたりなかつて、さて誰を殺したもんだつて。つってな。

毎度のことになつちまつたつて、殺さなきゃなんねえんだから、家長つつのは大変だわな。

誰を選んだつて、悲しいに決まってるんだからよ。

悩んで悩んで、どうしたもんだつてなるべ。

眠れねえわなあ。

んだら、家長の父親がよ、寝息でねえな、眠ってはいねえな、つて気づくべよ。

これは近々、来るべきときがくつて。

母親は先に山に置いてきたし、娘もひとり白殺したから、あとは家長には娘とせがれと妻と父親があつたんだ。

んでは、父親は自分の番だな、歳の順だつて、と思つたんだ。

でも、寝息の様子じゃ、まだ誰を捨てんのか決めかねてるようだあ。

爺さまとしてはよ、孫、殺されつちまうのはうんざりだつたつてよ。

んだけんと、自分が山さ捨てられつちまつたら、これは困つたことになるつつことが、爺さまは思い当たんだわ。

男の子がひとりいっけどよ、まあ子どもだ。のら仕事はとてもできめえ。

んで、爺さまが捨てられつちまつたら、男手は家長だけになつち

まあな。

したつけよお、今年の冬は、ひとり食い扶持さ減んだから生きてかれっかもしんねえけん、来年は田んぼも畑もどうにもなんねえべ。んだら、来年はもつと食べるモンねえことになっちまあ、これじゃ、来年の冬はもつと厳しいことさなっぺ。

そんだら、今年は自分が山さあがって、来年は孫がふたりして捨てられっかしんねえわ。

孫を生かすにはどうしたもんだっぺ。

自分だけが死ねばいいってもんでもなかつぺ。

苦しぐても、生きてのらさでねえと、もつと酷いことになんたからなあ。

んだからって言っても、食べる口が減らねえことには、今年の冬も越せねえんだから、やっぱり自分が死なねばなんねえかなあ。

爺さまは、どうすべか、どうすべか、つってよ、やっぱり眠れなかつたんだわな。

朝日がのぼるまえのごとだ、寒い空気が爺さまの耳さ当たって、爺さまは「はっ」としたんだわ。

うつら夢に、生きる覚悟をしたのはそんな時だ。

その時分になつと、さすがに家長も考え疲れちまつたんだっぺ。孫も嫁も、寒そうだけんとよく眠つてら。

爺さまはこつそりと家を抜け出してよ、そのへんさ落ちてた石をつかむなり、口の中さ入れたんだ。

ゴリゴリしててうまかねえわ。

んでも、これなら大丈夫そうだと思つたんだっぺ。

その日っからよ、爺さまは嫁さんに言うんだわ。

「おらあ、これから石を食うからよ、その分の飯はみんなにやって

けらい」

んで、皆で貧しい食事だけんと、爺さまの碗にはその日っから石が盛られてよ。

うっすい粥と、ぺらっぺらの漬け菜くれえしかねえ食いモンだ。

だのにゴリゴリ言っつて爺さんが石を噛んでんのを、孫たちは不思議に思っつたつぺなあ。

年寄りだもの、迷惑かけたかねえんだ。

できることなら息子に「殺してくれ」て言いてえんだっぺ。

んでも、しゃあねえ、生きなきや孫が生きらんねえかしんねえ。

その年に誰も死なねえようつたするためには、食うことさ減らすしかねえものよ。

食事してんの目にしたら腹が減るべよ。

んだから爺さまは、石をしゃぶつて腹が減つてんのを誤魔化してたんだわな。

それに、石を噛んでつと、歯がぼろになんだわ。

欠けたり抜けたりしてよ、口んなかさ血の味がすんだから、腹へつてんの誤魔化すのにはちようどよかつぺ。

そりゃ、たいそう痛い思いだっぺけど、それしか思い浮かばなかつたんだわな。

これが村で有名なつてよ、近所の爺さまや婆さま、真似を始めたんだわ。

子どもや孫の食いモン食べつちまうわけさいかねえもの。

それに殺してくれつて頼んだら、頼まれたほうの気の毒だっぺ。

死んだら何もわかんねえんだ、死んだほうは短い間だけ我慢すりゃいいんだけどが、頼まれつちまったら、その後、生きていく間、ずつと我慢しでかなきゃなんねえ。

生きててやりてえと思っつたんだっぺ。

迷惑かけねえようにしながら、力になってやりたかつたんだっぺ。

孫たちは、そんなことは分かってねえが、たかしんねえけんと、もしかしたら、目の前で石を食ってるのを見て、ひもじい時は石をカジってればいいって思ったのかもしんね。

もしかしたら「腹へった」ってあんまりうるせえから、親に「石でもかじってる」て言われたかしんねえ。

もしかしたら、自分も食いモン食べなくして、残った分をほかの家族にやりたかったのかしんねえ。

こつそり隠れて石をかんでよ、

「歯がいてえから食わねえ」

つつつて、食う量さ減らしたんだわ。

んでも、頑張っても、飢えんだもの。

口減らしつつつたつて、生きるには食いたくなるもんだつぺよなあ。

その村は、そうやってたくさん年寄りと子どもらが頑張ったんだけんとが、やっぱり無理だわ。

村の決まりごとにしちまつたんだわ。

「今年、誰も間引きをしてねえ家は、村八分にする」

* * * * *

【筆者解説】

未曾有の大災害、東日本大震災。

本稿は、麟龍鳳先生の企画『Smile』に向けて書き下ろしたものである。

その企画は「内容は、日本の笑顔を願うもの、被災地復興を願うものだったらなんでもいいです」と明記されており、甚だそれにそぐわぬように、読者のかたには思われるかもしれない。

しかしながら、実際に被災地で「被災者の慰めになるために話を聞く」という簡易カウンセリング、あるいはリーディングと言われるボランティアをしていると、被災直後は特に、上記の話に通ずる部分がたくさんあるように感じた。

自分の命と引き換えにでも行方不明になった子が見つかってほしい。

自分は年寄りなのに、死んだ孫に申し訳ない。

迷惑になりたくないのに、年寄りな自分は足手まといで復興の手伝いもできない。

歯欠はがきの思い、と、筆者は呼んでいる。

自分はどうなってもいいから……。

むしろ自分は役立たずだから……。

それだったら代わりに、子どもを、孫を。

それだったら代わりに、親を、祖父祖母を。

自分の身よりも大切であるものが、我々はどれほどあるだろうか。もしかしたら無いかもしれない。

曾祖母によれば、これらの説話は東北のものであるという。

おばけと昔話が大好きな幼少の頃に聞いた、おばけの正体とでもいふべき衝撃的過ぎる内容で、いまだに耳の奥に鮮明に残っている。

学生になって「遠野物語」をちらりと読み、筆者は当時の東北のひとたちの辛さや苦しみを想像した。

特に、生き残ったひと。

特に、子を泣きながら殺した親たち。

呪われなければならぬ、祟られなければならぬ、恨まれなければならぬ、生きていくというのはそういうことだったのかも思えないと思った。

しかし。

本当にその当時に、筆者は齒欠く思いを理解していたと言えるだろうか。

夢枕に死んだ人たちに恨み言を言われて、それでも、何かしらの不思議なめぐり合わせで「生かされている」と思わねばならない、そうした感情を理解できただろうか。

筆者は、たくさんの人に「それでも私はあなたに生きていてほしい」と告げ続けた。

こんなことを言わねばならぬ残酷な自分に嫌気がさす。

それでも、真実だ。

筆者は思う。

時間を経て、なおまだ復興のさなか。

家族を思える気持ちだが、どれほどの原動力となっているか。

東北には、こんなにも家族を思っている民話があるではないか。

苦しい長い時間だ。復興とは何だろう。そんなにも長い間、苦しむことなのか。

それでも傲慢に、生きていてほしいと願うのは、本当の意味で復興していくために、その苦しみの長い物語を、ただ単純に「絆」を連呼しているだけの我々に伝えてほしいからである。

家族を語り伝えるのは、本当の意味での輝網であること信ずる、
説話家としての願いである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5151ba/>

曾祖母講釈 間引き三篇（および筆者解説）

2012年1月14日09時47分発行